童貞の心

廻間 小太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然、後輩女子からラインが来た。

こんな時、童貞はどうするのか。

目　次

童貞の心 ―――― 1
後輩ちゃんと過ごすド深夜 ―――― 6

童貞の心

『先輩！お久しぶりです、研究室の質問って何を聞かれたとか覚えてますか？』

それは唐突だった。

仕事が終わり、夕飯や風呂も終わらせ、完全にゲームの時間にしようとしていた矢先の事だった。

《ごめん、俺研究室入ってないんだわ》

完全に意表を突かれるラインだった。

何を隠そうこのラインの相手、自分が所属していたオタクサークルの後輩女子なのだ。この年までキッチリ童貞な私はそりゃもう驚いた。

驚いた結果、ふざけたことをぬかす。

《というかもう大学生ですらないんだわ》『ふぁ⁉？』

完全に余計な話である。私はこの春大学を中退して、９月から社会人としての生活を始めていた矢先だった。

『そうだったんですね。ごめんなさい知らずに聞いちゃって』

『まぁ言いふらす事でもないからねぇ。それで研究室だっけ？』

この時、ラインではなんでもない風を装っているが、リアルでは大慌てだった。当然の如く研究室での面接で聞かれる事なぞ、知るわけがない。万事休すかと思われたその時一つの閃きが頭をよぎる。

（そうだ！面接としてのアドバイスをすれば良いんだ!!）

後輩女子からのお願いに震え上がり無い頭を振り絞る童貞の姿。さぞ滑稽であろうが仕方ない、本人はガチだ。

結果、面接官とのコミュニケーションの取り方や、アピールの仕方など、当たり障りの無い事しか伝える事が出来なかった。

『先輩優し過ぎる。ここまで親身に……ありがとうございます!!』

《他人に優しく、自分に無頓着。それがワイや》

『自分もですｗｗ』

ここまでのラインでニヤニヤしない童貞が居たら名乗り出て欲しい。ちょっとコツ教えて下さいお願いします。

その後、雑談が続きゲームの話で１時間程盛り上がり、その場で分かれた。

当然、その夜はモヤモヤしたし、悶々としたし、ムラムラ……は流石にしなかった。

翌日、仕事上がりにラインをしようかと迷った。

前日の段階で雑談でも愚痴でも来てくれて構わないと言われていたが、こちとら筋金入りの童貞、後輩女子とのラインに迷わない訳がない。
五分程右往左往した結果、仕事の雑談を送る事にした。
（あーーっ、やったわーーー！大丈夫かこれ!?マジで大丈夫かこれ!?!?!?）
大パニック寸前である。
相手にどう思われているか、相手が自分の言動や姿にどんな感想を抱いているのか、不安で仕方ない。文字通り夜も眠れないほどに。
『ｗｗｗｗｗ』
（ハイ、一笑い頂きましたァー!!）
この時の脳内ＢＧＭは完全勝利ＵＣである。
この程度で一喜一憂している男が何に勝利しているんだと。
その後、帰りの電車内でまた1時間程ラインを交わす。
当然ニヤついていた。
冷静に振り返ってみると相当ヤバい絵面だった筈だ。
汗臭い、ニヤつく、スマホに顔を近づけている。
よく通報されなかったもんである。
ラインを交わし終わり、ふと目が覚めた。

（俺、相当気持ち悪い事口走ってなかったか!?）

ラインで顔が見えないままに普段と同じテンションで会話をするのだ。

正直、終わった後が気が気じゃない。

自分のラインにどう思っているのか、気持ち悪くは無かったか、そうならそうと是非言って欲しい、改めるから。なんならもう話しかけないから。

そう思いつつも、またなんかあったらライン送ろうと考えているのが、童貞の童貞たる所以である。

そして、なによりも頭を占めるのがこの疑問だ

【脈はあるのか、無いのか】

やはりどうしても気になってしまう。だって童貞だもん。

《2日とも1時間も相手してくれたんやぞ！あるに決まっとるやろがい!!》と騒ぐ本能〝自分〟。

『そこらへんにしとけ本能、先輩からのラインだぞ?そもそも無視するっていう選択肢が無いだけだ。ただの付き合いでラインしてくれただけだ。夢を見るのも大概にしろ、まぁ見るだけならタダだけどさ』と言う理性〝自分〟。

期待する心と期待しない頭が見事に真っ二つに分かれている。

そうして葛藤しながらラインの履歴を読み返してまたニヤニヤするのだ。

明日はなんて送ろうかなどと考えながら。

後輩ちゃんと過ごすド深夜

とある夜、翌日に偶の休日を控えた私はまたしても後輩ちゃんとＬ○ＮＥをしていた。

《ところで、今時計見たら2時半過ぎてんだが平気かい？》

ふと気になったのでなんの気無しに聞いてみた

『家帰ってほぼ何もしてない』

『なんなら今ぱんつしか履いてない（）』

『おふろぉぉぉ』

リアルでぶったまげた。

そんなまさかと、そんな訳あるかと冷静な自分が必死に問いかけるが、一度起動してしまった童貞脳はちょっとやそっとじゃ停止しない。

勝手に脳内補完で映像を作り出しやがる。

女子大生が部屋で1人、その滑らかな肢体を惜しげもなく晒している。

楽しげにタイピングをしている。

その身を隠すのは余りにも頼りない布が一枚のみ。
ここまできてやっと思考を中断出来た。

『女の子がこんな時間まで風呂入って無いどころかそんな格好でうろつくとか!!早く入ってきんさい!!』
《いやーまぁ、家帰ってきて》
《あつーい、風呂入らなきゃーって脱いでそのままという》
『居た堪れない』
本当に居た堪れない、話を振ったのはこちら側なのだ、ほんっっっっっとに申し訳なかった。
《先輩とお話しするの楽しくってついw》
本当にこの後輩は分かってる。どうされたら男が喜ぶのかを完全に理解している。
完全に男心をくすぐられた。
その後もなんやかんやと話題が逸れつつも○ＩＮＥが続いてしまう。
『ところで蒸し返すようだけど風呂はちゃんと入ったんでしょうね?』
《いまはいったとこです》
《まずは顔洗おうかなと思ってました》

『嫌な予感的中!!!!!!』
この時、本当に飛び出るかというほど心臓が暴れ回った。
再起動した童貞脳はまたしても映像保管を始める。

草木も眠る丑三つ時、1人の少女が作り出す水音がどこまでも反響していく。
纏め上げた長い黒髪の下、白く細いうなじを水滴が滴る。
ほんのり上気した肌、若々しく瑞々しいその丘を湯気達が遠慮がちに通り過ぎて行く。
樹脂はその背で少女を支える。重みを伝えてくるのは柔らかな〝モノ〟。遠慮など無く、心底安心しているかの如く預けられる体重に樹脂は一体何を思うのか。
《あら～^　^》
《大変だなぁ～♡》
本当にこの娘は分かっているのだろうか。
その一言だけでこちらがどれほどのたうち回りたい気持ちに駆られているのか。
童貞には刺激が強すぎるというのに、平気でこういう事を言う。
《まつ毛に乗った水滴とかも想像しちゃちましょ～》
まさかの燃料投下だ。

刺激が強いって言っているのに攻撃をやめない。
１０割からかっているのだろうがそのからかいにこれほど心を揺さぶられるのだから童貞は手に負えない。
医者も遠投で匙を投げるだろう。
『やめてマジで!!そういう事言われると想像しちゃうから!!童貞だから！無駄に妄想力だけはあるからぁ!!』
《ふふふ》
《変態さんですね》
《にやにや》
妄想力というのは本当に凄まじいという事をこの時、嫌というほど〝分からされた〟。
ただの文章、たったの数文字であるはずなのに、心臓は暴れ回り、ニヤケ面は止まるところを知らず、実際に耳元で囁かれたかのようなゾクゾクした快感が耳に奔る。
『やべぇはコレ脳内補完ＡＳＭＲだ、耳ゾクゾクする』
『文字で見るＡＳＭＲ』
《ふふふ》
《囁き配信って奴だ》

『気分は推しが風呂場から囁き配信。しかもど深夜に』
たった一文に興奮するワードが満載だ。情報量が多過ぎで脳がオーバーヒートを起こしそうになる。
《ＡＳＭＲをしてる人は視聴者みんなに向けてですけども》
《これは一対一で、先輩だけに向けてですからね》
その瞬間心臓が止まった。
握られたかのような、撫でられたかのような、何をされたのかは不明だが、悲鳴を上げ、暴れ回る心臓が何事かあったらしい事を声高に主張している。
もはや脳と心臓は別個の生物に分かれてしまったかなようにいう事を聞いていない。
脳は無限に映像を作り出し、心臓は勝手に走り出す。
『おまそれは致命傷』
『やべぇ、破壊力やば過ぎ』
『真っ直ぐ歩けない』
どうやら平衡感覚も仕事を放棄してしまったようだ。
『よっし、なんとか寝床ついた』
《先輩の印象だいぶ変わりましたよ》
《変態さんだったんですね♡》

だからその一言だけでこっちは心臓が……。
『前から割とはっちゃけてたつもりだったんだけどなぁ』
『意外とまだリミッターあったんだなぁ』
《まだリミッターあったんですねぇ》
《よかったです》
それは一体どういう意味なのだろうか。
何が《良かった》のか、問いただしたい。
しかしもう脳も心臓も言うことを聞かない現状、そんな余裕は一欠片も存在しない。
《なら寝ましょうか》
《先輩おやすみなさい》
この二言だけで添い寝されてるかのような気分になってしまう。
そんな事は起こり得ないのに、脳は勝手気ままに虚像を結ぶ。

風呂上がりでしっとりと濡れた髪。滑らかな黒髪はなるほどこらが烏の濡れ羽色と言うものかと納得させるだけの説得力がある。
油断しているであろうラフな部屋着は時たまその隙間から秘密の欠片を覗かせる。
咄嗟に顔を背ける事しか出来ず、指摘もしない。

仰角も俯角も必要無い全くのゼロ距離。触れれば届くであろうその距離がどうしても埋められない。

シャンプーの甘い香りがする。鼻腔をくすぐられつつも背中を向ける。妄想の中であっても向かい合う勇気は無い。

背中合わせに布団に潜る。

もう限界だ。いい加減終わらせよう。

《おやす〜ノシ》